

研究主題 「地域と学校をつなぎ開かれた学校づくりを目指して」

～教育環境の充実のため地域の力を生かすための副校長・教頭としての関わり方～

提言者：鳥栖基山教頭会 鳥栖市立鳥栖北小学校 梶原 康裕

1 主題設定の理由

急激な社会の変化に伴い、学校と地域を取り巻く課題はますます複雑化、多様化している。いじめや暴力行為等の問題行動の発生、不登校児童生徒数の増加、特別な配慮を必要とする児童生徒数の増加など、多様な児童生徒及び保護者等への対応が必要な状況となっている。また、そのような学校の役割の拡大により教員の業務量が増加しているといった課題もある。一方、地域においても、家族形態の変化、価値観やライフスタイルの多様化等により地域社会における支え合いやつながりが希薄化し、地域社会の停滞や教育力の低下などが指摘されている。学校運営を行う上でも、地域の力なくして語ることができない時代であり、こうした状況の中、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という学習指導要領の目標を学校と地域が共有し、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、相互の連携・協働のもとに学校づくりと地域づくりを進め、一体となって児童たちの成長を支えていくことが必要である。

教頭は、学校教育法第37条「校長を補佐し、校務を整理し、必要に応じ児童の教育をつかさどる」と規定されているが、「校務を整理し」の中には、教頭が窓口になって地域との交流、地域からの支援を具現化していく必要がある。それぞれの学校が地域の特色を生かしながら、様々な取組を行っているが、地域との交流を行うにあたり、副校長・教頭がどのような働きをしているのか、連絡調整をどのように図っているのかを実践事例を通して検証し、そこから特に学校としての成果と課題を学校運営に生かしたいと思い、本主題を設定した。

2 研究のねらい

地域との交流を行うにあたり、副校長・教頭がどのような働きをしているのか、連絡調整をどのように図っているのかを見える化する中で、副校長・教頭として求められる資質・能力を探る。

3 研究の経過

- (1) 1年次
学校運営に関する副校長・教頭としてのICTの活用について
- (2) 2年次
学校運営に関する副校長・教頭としての地域との連携について

4 研究の概要と成果

以下5つの実践事例を紹介する。なお下線部は教頭の動きを示す。

- (1) 茶摘み・お茶いれ（基里小学校）

①茶摘みまで

学校運動場南に、お茶の木がある。毎年お茶の摘み取り時期になると、3年生が茶摘みを行っている。長年お世話をしていたいた鳥栖基山地区のお茶部会は昨年解散してしまったが、藤田農園の藤田様に、引き続きお茶の木の管理、茶摘みをお願いした。4月はじめに藤田さんが来校され、茶摘みの日程を相談。葉の生育具合と製茶業者の機械の稼働日に合わせて、実施日時を確認した。その後の具体的なやり取りは直接3年生担任が行った。

茶摘みの日が決まったあと、PTA会長、基里老人クラブに連絡を行い、当日の手伝いを依頼した。また、報道機関への投げ込みを行った。

②茶摘み当日

毎年行っているのので、PTAや老人クラブの方がよくご存じで、作業の手順を円滑に進めていただいた。お手伝いの方への挨拶、お茶やお礼のお菓子の準備、報道機関への対応を行った。

③茶摘み後

製茶を業者に依頼した。できた茶葉は保管し、「お茶のいれ方教室」「5年生の家庭科実習」「来客者用のお茶」などに使った。



【写真1】茶摘みの様子

④お茶のいれ方教室

自分たちが摘んだ茶葉で、お茶をいれて飲んだ。茶葉の量やポットの湯の冷まし方、湯飲みへのつぎわけ方等は、藤田さんが説明した。日程調整は、3年生担任が行い、当日は、藤田さんと3年生保護者数名が参加した。教頭は、道具の準備・片付けの手伝い、お礼の茶菓子の準備をした。

(2) 家庭科ボランティア（鳥栖北小）

①校長先生のつぶやき

6月上旬、校長から「まちづくり推進センターのセンター長と家庭科ボランティアの話をした。今年度、実現できないだろうか。」という話があった。コロナ禍以前は、5年生、6年生の家庭科のお手伝いに来られていたが、コロナ禍で、地域との関わりが途絶えた。コロナ禍も終わり、家庭科ボランティアを復活させ、児童の学びを深めると同時に地域の力で再び学校を盛り上げていくことになった。

②センター長及び授業者との打ち合わせ

6月の中旬に、センター長と打ち合わせを行った。嘱託員会（区長会）では、出席する校長から区長に依頼を呼びかけてもらった。家庭科主任と実際に授業を行う先生に今後の流れについて説明を行い、授業予定表を作成してもらった。6月の嘱託員会を経た後、センター長から、実際に家庭科ボランティアに来ていただく方の名前が入った計画表をもらった。これを、家庭科主任と実際に授業をする先生に渡し、授業当日の流れの打ち合わせをした。

③家庭科実習当日

5年生の家庭科の裁縫の時間がある7日間にわたり、1日につき5～10名来ていただいた。センター長と一緒に家庭科ボランティアの方を出迎え、出欠確



【写真2】実演の様子

認をし、家庭科室まで案内した。各グループの中で家庭科ボランティアの方が実演を見せ、支援していただいたことで、児童の困り感も少なかった。担任は、各グループを見回り余裕をもって評価ができた。

(3) 餅つき会（若葉小学校）

①PTA父親委員会からの提案

令和5年度の5月のPTA企画委員会で、PTA会長や父親委員長より「今年度はコロナ禍も明けたので是非子どもたちが喜ぶ新しいイベントをしたい」と提案があった。話し合いの中で学校側から「子どもたちだけではなく、保護者同士や地域の人とふれ合うようなイベントにしましょう」という意見を出し、企画を進めることになった。

企画委員会のメンバーからは、そうめん流し、夏祭り（出店）、餅つき、凧あげ、羽根つきなどの意見が出た。安全面・準備にかかる時間・人や場所の確保・コストの面等、様々な視点から意見交流を行った。学校としては、餅つきを推薦した。理由としては、学校にある程度餅つきの道具が揃っていること、学校で行うことで教職員が協力できるメリットが大きいこと、冬に行うことで十分準備ができることである。最終的には、保護者同士や地域の人とふれ合うイベントということで餅つき会をすることに決まった。

②餅つき会の内容についての話し合い

7月のPTA企画委員会の中で、餅つき会を行う日程が令和6年1月7日（日）に決まった。当日にどれくらいの人数が参加するのかを把握するために学校で作成した事前の参加申し込みのアンケート（グーグルフォーム活用）を取るようになった。父親委員長が地域で餅つきを行っている萱方町の区長さんを訪ね詳しい話を聞いた後に、計画書を提案してもらった。話し合いの中で、学校側から道具や材料や費用については問題ないが、教職員や保護者だけでは準備が難しいので、「経験のある人手がほしい」という意見をお願いした。

PTA企画委員会の決定を受け、職員会議で教職員にもイベント内容を説明し、協力を依頼した。年明けの最初の土日ということで難しい面もあったが、事前準備や当日のどちらかに参加（短い時間でも可）ということで教職員の9割程度の協力が得られた。

③地域への協力依頼

11月の企画委員会では父親委員長より、道具や材料のリスト、前日の準備や当日の流れ等の細かなスケジュールが提案された。その後、PTA会長や父親委員長がまちづくり推進協議会の話し合いに参加され、その場で協力を依頼した。

その結果、JA婦人部、親父の会（15名所属）、萱方会の方（20名所属）の協力が得られることになった。

④事前準備（前日）

令和6年1月6日（土）に、学校の家庭科室で事前準備を行った。PTA父親委員会、PTA執行部、教職員に加えて、マチコミメールで保護者にも協力を呼びかけ総勢40名程度で約2時間準備を行った。

その際にも、JA婦人部や親父の会や萱方会の方にも参加いただき、当日の最終確認をもらった。

⑤餅つき会（当日）

令和6年1月7日（日）に、家庭科室と中庭、駐車場で餅つき会を行った。朝早くから、JA婦人部や親父の会や萱方会や保護者の方の協力のもと、手際よく準備が進められ



【写真3】餅つきの様子

た。次年度以降も継続するように教職員やPTA役員で餅つきの工程や様子を写真で撮った。子どもたちの中には餅つきを初めてする子どもも多く、どの子どもも笑顔で楽しく参加していた。

⑥事後の振り返り

2月の企画委員会で、餅つき会の振り返りを行った。細かい反省点や改善点はあったが概ね成功し、次年度以降も継続して実施することになった。JA婦人部や親父の会や萱方会の方との連携が取れたことが何よりの成果である。また、親父の会に所属していた学校の保護者2名がこれを機会に学校のPTA活動に興味をもたれ、令和6年度のPTA副会長の役に就いた。初めて行う大きなイベントで大変だったが、「地域とともにある学校づくり」につながる取組となった。

(4) ブリヂストン吹奏楽団（弥生が丘小）

①4年生の担任からの依頼

「ブリヂストン吹奏楽団久留米」は、全国レベルのコンクールで金賞を30回以上受賞しているトップレベルの社会人吹奏楽団である。そんな吹奏楽団が弥生が丘小学校に来校し、演奏をすることとなった。

父親が吹奏楽団に属している4年生の女子児童がいた。その担任から、「先日、個人面談が

あった際にぜひ小学校で演奏したいという申し出があった。教頭先生が窓口になって、実現させてほしい。保護者から後日連絡があるはずです。」という話があった。

②事務局との事前打ち合わせ

事務局と連絡を取り、打ち合わせを行った。日時、参加対象児童、演目、スケジュール調整、道具置き場、楽器の搬入、トラックの出入り、体育館の配置についての確認作業を行った。未決定事項はメールでやりとりを行った。話し合いでの決定事項を連絡会の際に職員で共有し、教務主任と日程調整を行った。事務局とは3度ほどメールのやりとりを行った。1～3年生は長時間の演奏を聴くことが難しいだろうということで、4～6年生の児童300名ほどの鑑賞に決まった。しかし、事務局から、「せっかくだから1～3年生にも聴かせてあげたい。昼休みにリハーサルをしているので、その時間だったら聴くことができますか。」という相談があった。

その旨を1～3年生の担任の先生方に確認をとったところ、特に問題はないとのことだったので、鑑賞希望する児童は自由に体育館に行きリハーサルの演奏を聴くことができるようになった。

③当日の動き

昼休みになり、体育館には1～3年生が60名ほど鑑賞に来た。生で聴く演奏の迫力に児童は圧倒されていた。4～6年生の児童が体育館に入場し、演奏が



【写真4】楽団の演奏

始まった。始めは、堅かった児童も演奏が進むにつれて、音楽に合わせて体を動かしたり、歌ったりとあっという間の45分間であった。

(5) 学校運営協議会からの発出（田代小学校）

①令和4年度学校運営協議会発足

～コミュニティ・スクールのスタート～

学校運営協議会の構成メンバーは前年度末に決定していたので、第1回の学校運営協議会の話し合いの流れを考え、構成メンバーに案内状・当日のレジュメを発送した。当日の協議では、学校での学びの支援など、何が必要なのか、何ができるのかについて意見を交わした。終了後

は、校長や指導教諭と話し合い、各学年からのアイデアを募り、学校運営協議会を通して地域や保護者に依頼していく流れを確認した。各学年からアイデアを募り集約する仕事は指導教諭に依頼した。

②第2回学校運営協議会 ～職員の思いを地域へ地域の方々の思いを学校へ～

職員からは、昔遊び、大豆育てに始まる豆腐づくり、教科「日本語」の学習で取り組む「郷土カルタ」づくり、家庭科での糸や針、ミシンの学習などへの支援要望が出されていた。地域の方々からは、「盲導犬と生活されている方がいらっしゃるので福祉の学習ができそうだ。」「災害時の自助や共助の大切さについての体験学習をしたい。」などの意見が出された。教頭からは、「これらの取り組みを実現していきたいが、コロナ禍の中で様々な取り組みが中断していたこともあり、地域のどなたに連絡し、どのように働きかけていけば実施できるのか、分からない。職員もこの数年で入れ替わっており、以前のノウハウが失われている。」と伝え、協力をお願いした。

③第3回学校運営協議会

～地域の力を学校に『匠（たくみ）の活用』～
まちづくり推進センター長から、「センターでは、地域の『匠（たくみ）の活用』を進めていこうと考えています。学校に必要な人材等をセンターに声をかけてほしい。センターのネットワークを活用して募集したり依頼したりすることができる。」とっていただいた。前回の学校運営協議会で話題にした学校の窮状（ゲストティーチャーの募り方や連絡先等が分かりにくくなっていること）を考慮していただき、大変心強く思った。その後は、新しい試みをする場合は、教頭または指導教諭が、まちづくり推進センターに出向いて内容を説明し、地域の方への募集や依頼をセンターにお願いするようになった。令和5年度以降は旧学年から新学年への引継ぎもスムーズになり、学年の担当がゲストティーチャーに連絡をとり、期日や内容を調整することもできるようになった。

④地域の方とつくる活動

事前に、学年や指導教諭と確認をとり、実施方法やゲストティーチャーの待機場等、ウエルカムボードや謝礼（ペットボトルのお茶など）

の準備、駐車場の確保などを行った。ペットボトルのお茶や昼食代（給食費）は『開かれた学校づくり』の予算からの支出を事務主査に依頼した。当日は、事務室へ駐車場や待機場所への案内、湯茶の依頼をした。

年度末に、6年生が感謝の手紙を書く際には、ゲストティーチャー等の名簿を作成して学年主任に渡した。書き終えた手紙は、区長会



【写真5】地域の歴史学習

が開かれる日に、6年生がまちづくり推進センターへ届けた。他にも、1年生「伝承遊びを地域の方と」、3年生「豆腐づくり～すがたを変える大豆～」、3年生「地域の方とカルタ大会」、5年生「はじめてのソーイング」「はじめてのミシン」などの学習を行った。

5 研究の成果と課題

【成果】

下線部を一般化すると副校長・教頭として以下の資質・能力が必要となる。

- ・地域と職員、児童をつなげるために働きかける力
- ・校内における連絡・調整能力
- ・地域と職員で作るチームで働く力
- ・固定概念にとらわれない柔軟性
- ・地域からの要望、確認、質問などを聞く傾聴力
- ・ゴール地点（実施日当日）を見据えた計画力
- ・取組や資料を整理して次年度につなげていく力

【課題】

- ・ねらいが明確でないと次年度につながらず、教育環境の整備につながらない。
- ・地域との関わりが増えれば増えるほど、窓口になる副校長・教頭の業務が増える。
- ・打ち合わせ後、職員との折衝がうまくいかないことがある。
- ・職員の協力がいない場合は、教頭が一人で抱え込むことがある。